

佐怒賀正美第六句集『天樹』（現代俳句協会、2012年）を読む

Reading “Tenju” (Modern Japanese Haiku Association, Tokyo, 2012) by Masami Sanuka

鎌倉 佐弓

Sayumi Kamakura

佐怒賀正美は、ストイックなまでに真面目に俳句に向き合う俳人の一人です。これまではその真面目さが前面に出てしまい、今ひとつ 俳句に面白みが欠けるくらいがなきにしもあらずでした。ところが、嬉しいことに、今回発表した第六句集『天樹』では、真面目は真面目なのですが、読み進むにつれて、時に笑い、時にしみじみとうなずき、いつの間にか私の心は何か豊かなものに満たされていたのです。佐怒賀の俳句に何が起きたのでしょうか。

答えは佐怒賀の想像性にあると思います。彼はこれまでも想像性を駆使して俳句を詠まなかったわけではありません。たとえば「ビッグバン大向日葵が首振れば」「身にふかき鬼に及びし湯冷めかな」などのように。今回の句集では、その想像性にさらに磨きがかけられたというか、実景と想像の間から、ふつふつと湧き上がるような情感さえ感じとれたのです。実際に俳句に当たってその変貌を見ていきたいと思います。

まず空間への想像があります。

冬天は垂直に墮ち土器の中
でんでら野よりやつこらと稲干しに
まだ春の夕日はこない涅槃境
冥界の外までちりぢりかたつむり

冬天と土器の間の広大な空間。遠野物語では姥捨ての地だったというでんでら野と、現実稲を干しに行く人との時空を越えた空間。この世と涅槃との境に落ちる春の夕日。現実から冥界の外まで出てしまうかたつむり。いずれも想像と実際の事物とがあいまって不思議な空間を作り出しています。

次に時間への想像があります。

象といふ秋の時間の巨いなる
透きとほる時の果てより春の息

象の体がまるごと秋の時間だという、その比喩の妙味。春の息のスタート地点としての透きとおる時の果て。いずれも時間への豊かな想像から生まれました。

さらに彼の想像は広がります。

はつ夏や明王あそぼと童子たち
夏逝くや呪力失せたる落し穴
秋暑し夜行の百鬼つまづくも
この上を山が飛びしか冬泉

噴水の^鼻秀や荊冠のとどまれる

恐ろしい明王を無邪気に誘う童子たち。夏の落とし穴にある呪力。夜行の百鬼。冬の泉のはるか上を飛んでいった山。イエスの頭にのせたと伝えられる荊冠。どれも読者をはっと立ち止まらせ、うーんとうならせ、なるほどと楽しませてくれます。その訳は、これらの想像上の事物が、佐怒賀正美自身の実感で支えられているからでしょう。それもかなり強い実感です。

たとえばこんな句があります。

要するに君はドーナツ天高し
大玉は母のお尻だどンドン押せ
寒明けや痔の大物を除けくれし

思い切り笑わせてもらった後、しみじみとした思いが湧く作品ばかりです。それもひとえに、これらの句には作者の本物の実感があるからだと思います。この実感が招き寄せた想像性だからこそ、生き生きと読者の胸に届いたのです。

また今回の句集では、次のような現実を見据えた句も忘れてはならないでしょう。

原発密閉ぎつしりと蓮の花
百年後いまはセシウム葦ごもり

お釈迦様の周りに咲くという蓮の花々。見動きならぬほどぎつしりと咲くその下に原発を密閉し、封じ込める。もう決して原発など見えないように。放射性物質など漏れてこないように。この蓮の花に込められたのは、願望と祈りにほかなりません。また、葦の間に小さな巣を作り、休む小鳥のように、葦の間にあるセシウムは、百年後はどうなっているでしょう。もし起き出してきたら。想像するのも恐ろしい事実がここには潜んでいます。

今回、私はこの句集で、想像性を俳句に活かす術を身につけ始めた佐怒賀正美を見せてもらいました。これからの作品も楽しみに待ちたいと思います。